

Title	丸括弧表現の空用法における記述的考察
Author(s)	板垣, 浩正
Citation	大阪大学言語文化学. 27 P.41-P.53
Issue Date	2018-03-31
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/71225
DOI	10.18910/71225
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

丸括弧表現の空用法における記述的考察*

板垣 浩正**

キーワード：丸括弧表現、属性叙述、間主観性

In Japanese writing, some expressions occur with a parenthesis like the form “X (Y),” as shown in the phrase “*Tokyo Daigaku (To-dai)*.” This paper investigates an expression that does not contain Y and is used as Internet slang like “*Tensai ()*,” and shows its semantic and functional characteristics (hereafter Null-Parenthesis).

First, I introduce some previous research on parenthesis sentences. Research on these expressions began in the field of natural language processing, and has been carried on by theoretical linguistics, such as Relevance Theory or Cognitive Linguistics. This paper empirically shows that schematic descriptions in previous studies are not semantically adequate because of the idiosyncratic features of Null-Parenthesis. This suggests that semantic characteristics of some parenthetical expressions need a lower-level (individual) description, rather than an abstract description.

This paper observes some behaviors of the Null-Parenthesis associated with several grammatical phenomena. It examines: (i) comparison of the Null-Parenthesis usage with a square-bracket expression; (ii) the acceptability in the interrogative sentence; and (iii) the occurrence position of the usage of the Null-Parenthesis. This examination indicates that the Null-Parenthesis conveys the cynical attitude of the writer on the word (or phrase) immediately before the parenthesis. Further, this paper points out that (iv) the Null-Parenthesis cannot appear in the specific event or action, and (v) when the verb that occurs with the Null-Parenthesis is taken as a possible form [- (*rar*) *eru*], the Null-Parenthesis can only be accepted in the attributive possible meaning of the verb. This means that the Null-Parenthesis has a constraint that it cannot express the cynical attitude toward a specific event, but instead toward a property of the thing. Based on that consideration mentioned above, this paper argues that the Null-Parenthesis can be generalized as follows; it conveys the cynical attitude of the writer to the property designated by the preceding word.

* A Descriptive Research on a Japanese Null-Parenthesis (ITAGAKI Hiromasa)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期過程2年

In addition, this paper looks into the semantic extension of the Null-Parenthesis, such as “*Mou shukudai akirameta* ().” It presents that this type of usage can also be explained by assuming the semantic generalization mentioned in this paper, and Intersubjectivity proposed by Traugott (2003).

In conclusion, even though the Null-Parenthesis is a type of Japanese Internet slang, often regarded as a peripheral expression, this paper argues that this usage is not a vague expression, but rather a “linguistic” phenomenon.

1 はじめに

日本語の書き言葉では、(1) のような丸括弧や鍵括弧を使用した例が数多く見られる。とりわけ X (Y) の形式を持つ丸括弧表現は多様な用法を持つと考えられ、これまで様々な分類がされてきた。例えば (2a) であれば X の言い換えを Y が、(2b) であれば X の所属の補足を Y が担う。

- (1) a. 東京大学 (東大)
 b. 彼は「このままでよい」といったのだ。
- (2) a. 非政府組織 (NGO) (中山 他 2010: 380)
 b. イチロー (マリナーズ) (ibid.)

本稿では、この丸括弧表現のうち Y を持たない用法 (以下、**丸括弧表現の空用法** (**Null-parenthesis**) と呼ぶ) を扱う。これは、インターネットスラングの一つで、(3)、(4) のように、括弧内に一切の語句を伴わず生起する表現である。丸括弧表現の空用法は、前の語句に対して書き手の冷笑的な態度を暗示させる効果を持つ。詳細は後に議論するが、ここで簡潔に示すと (3) ならば「俳優」に対して、(4) ならば「配慮」に対して、書き手の冷笑的・懐疑的な態度を示している。¹

- (3) この自称俳優 ()、日本に住んでないのかよ²
 (4) 配慮 () を求めるなら最初からおごとくか言わなければいいのに³

馴染みのない者にとっては奇妙な使い方に思われるかもしれない。しかし、(5) に示

¹ 以下、引用の下線は特筆のない限り、筆者によるものである。

² <http://hamusoku.com/archives/9691868.html>

³ <http://blog.livedoor.jp/dqnplus/archives/1939294>

2017/11/14 採取

2017/09/15 採取

されるように、日本語のインターネットスラングを説明する複数のウェブサイトで具体的な言及をしている以上、ある程度定着していることがうかがえる。また、使用の由来は、(5) の指摘から推測するに「(笑)」から作られたと思われる。

- (5) a. 中身の無い括弧「()」は、笑いという意味で使われる「(笑)」の漢字部分を省略したネット用語です。⁴
- b. 「()」とは、「失笑」「苦笑」あるいは「絶句」「哑然」といった意味のネットスラングのひとつです。原型は、広く笑いを表す(笑)で、これが変化したものとなります。⁵

ただし、(6) で示される「(笑)」とは違い、空用法は(7)のように文末に生起されにくい。よって、空用法は原型となる「(笑)」と少々異なる振舞いを示すようである。⁶

- (6) a. 美人過ぎる漁師 40 歳 (笑) と対談した。
- b. 美人過ぎる漁師 40 歳と対談した (笑)
- (7) a. 美人過ぎる漁師 40 歳 () と対談した。
- b. *美人過ぎる漁師 40 歳と対談した ()

本研究は、この丸括弧表現における空用法の意味機能について考察する。そして、「直前の品詞に関して、それを使用したり評価されたりする人物・事物に対する書き手の冷笑的・懐疑的態度を表明する」という意味の一般化ができることを主張する。さらに、新たに拡張した意味解釈の事例を取り上げ、この事例もまた、本稿がまとめる意味的一般化と、Traugott (2003) が提案する間主観性によって自然に説明ができることを述べる。結論として、インターネットスラングとして使用される表現であっても、言語学的概念に基づく一般規則によって捉えられることを主張する。

2 先行研究

この節では、括弧表現に関わる研究を概観し、本稿で取り上げる丸括弧の空用法がこれまでの研究で十分に捉えきれないことを主張する。

⁴ <https://kw-note.com/internet-slang/kuuhaku-kakko/>

2017/06/05 採取

⁵ http://www.paradisearmy.com/doujin/pasok_wara.htm

2017/05/30 採取

⁶ 容認性判断は、SNS やまとめサイトを度々閲覧する日本人 3 名に協力してもらった。年齢は全員 20 代で、男性 1 名に女性 2 名である。ただし新規表現であるため、本稿では全員が一致した見解を示した作例のみを掲載し、実例も合わせて考察する。

2.1 自然言語処理の立場

括弧表現に関する研究は、伝統的には自然言語処理の分野で中心的に行われてきた。例えば、中山ら（2010）は、丸括弧における用法の分類を提示し、各分類に対して機械的な判別方法を提案する。彼らが提示した分類に関して、記述的根拠は記されていないものの、多様かつ混在とした丸括弧表現の用法を精査した点で、中山ら（2010）は理論言語学や日本語学においても十分に应用可能な提案をしている。

しかし、本稿で扱う丸括弧表現の空用法はこの分類で言及されていない。そればかりか、空用法の元とされる「(笑)」が「その他」に分類されており、詳細な特徴が説明されていない。したがって、「その他」のような周辺の用法という認識に留めることなく、意味的観点から分析し、一般化を図る必要がある。

2.2 理論言語学の立場

理論言語学からは、山森（2008）が関連性理論の観点から括弧の役割を議論し、括弧表現の概念的意味と手続きの意味の提案を行っている。しかし、彼女の関心は鍵括弧に留まっており、丸括弧への発展はみられていない。

黒田（2015）は、丸括弧表現に関する言語学的研究の不十分さを指摘し、認知言語学的観点から丸括弧表現における理解のメカニズムの解明を試み、「属性」用法、「補完」用法、「付帯状況」用法に分類できることを主張した。彼の研究では、本稿で扱う空用法を論考していない。ただし、彼は「(笑)」を「付帯状況」用法に分類しているため、本節では、空用法もこの「付帯状況」用法に分類できるか検討したい。

黒田（2015: 53）は、「付帯状況」用法を「(笑)のような、発話場面における状況の描写としての用法」と定義し、(8)のような脚本におけるト書きなどを例に挙げる。

(8) 王：(嘲笑う) 生意気な！わたしのマントルの力を見るが好い。

(黒田 2015: 53)

黒田（2015）に従えば、(8)における丸括弧内の「嘲笑う」は、その外側に示される「王」の発話に伴う態度や動作として理解される。さらに、黒田（2015）は、インターネット上の一部で使用される(9)も同じ用法に分類する。つまり、(9)ならば(8)と同様に、括弧内要素が参与者（この場合、書き手）の態度を指示していると考えられる。

(9) a. え…、なにそれは…（ドン引き）

(黒田 2015: 54)

b. お前のことが好きだったんだよ！（迫真）

(ibid.)

では、本稿で扱う空用法も、これらと並行して「付帯状況」用法に分類が可能であろうか。確かに、前節の(3)、(4)において、括弧内要素が参与者の態度（この場合、書き手の懐疑的態度）を指示している点は(9)と同様である。

しかし、空用法は必ずしも「付帯状況」用法に入るとは言い切れない。「付帯状況」用法は命題に対する態度や動作を、丸括弧内の要素によって言及するのに対して、空用法は直前の語句に冷笑的態度を表す点で大きく異なるからである。これは、次に示す例文(10)、(11)の対比から明らかである。(8)、(9)は(10)のように、括弧内の要素をナガラ節によってパラフレーズできる一方で、空用法は(11)のようにそれができない。

- (10) a. (嘲笑う) 生意気な！
 = 王は嘲笑いながら、「生意気な！」と言った。
 b. え…、なにそれは… (ドン引き)
 = 私はドン引きしながら、「え…、なにそれは…」と書いた。
- (11) 太郎は愛想が良い ()
 ≠ 僕は冷笑しながら、「太郎は愛想が良い」と書いた。

以上、本稿で扱う丸括弧表現に関わる主要な先行研究を概観してきた。先に見てきたように、括弧表現は自然言語処理や理論言語学の領域で分析が進んでいる。しかしながら、先行研究は本稿で扱う丸括弧の空用法に言及していない。加えて、丸括弧表現におけるこれまで分類では、いずれも空用法に対して意味的に妥当な説明ができない。次の節では、丸括弧の空用法の振舞いを分析することで、空用法の意味的・機能的特徴を明らかにする。

3 丸括弧表現の空用法における意味機能

3.1 冷笑的・懐疑的態度の表明

この節より、空用法の意味的・機能的特徴、とりわけ何に対して冷笑的・懐疑的態度を持つのかを論じる。この問題を着手するにあたって、まず本当に空用法によって冷笑的態度が暗示されるのかを鍵括弧と対比して確認しておこう。次の(12)において、鍵括弧内「美人過ぎる」は、(12a)のように引用の可能性もあれば、(12b)の強調、(12c)の皮肉・冷笑の解釈で使用できる。一方で、(12)に対応した丸括弧による(13)の例

では、(13c) のみ容認される。⁷ また空用法の場合、(14b) のように疑問文では生起しない。この点から、書き手が冷笑的態度を表明する時に生起することが推定できる。

- (12) a. 「美人過ぎる」県職員、山田氏。木村氏は山田氏をこのように述べた。
 b. 山田は美しく、気配り上手で性格もいい。まさに「美人過ぎる」県職員だ。
 c. <書き手が山田を美人とは思わないで>山田は「美人過ぎる」県職員だ。
- (13) a. ?美人過ぎる () 県職員、山田氏。木村氏は山田氏をこのように述べた。
 b. *山田は美しく、気配り上手で性格もいい。まさに美人過ぎる () 県職員
 c. <書き手が山田を美人とは思わないで>山田は美人過ぎる () 県職員だ。
- (14) a. 太郎はとても優しい ()
 b. *太郎はとても優しい () のですか？

3.2 空用法の定式化：何に・誰に冷笑的・懐疑的態度を持つのか？

本節では空用法の一般化を目指し、この表現が生起した時の解釈を記述する。まず、作例として挙げた (13c) ならば、丸括弧の直前に生起する語句「美人過ぎる」とは思わない書き手が「美人過ぎる」という評価を受けている「山田さん」を冷笑している、という解釈になる。(14a) でも同様に、「優しい」とは思わない書き手が「優しい」と言われている「太郎」を冷笑している。これらの例から、直前の語の使用者か、その語句であると謳われている人物を冷笑するという (15) のような一般化が考えられる。

- (15) 丸括弧表現における空用法の意味機能

形式：<文脈で想定される X について> Y ()

意味：Y という評価を受けている、あるいは Y を述べる X に対し、Y の真意を疑問視する書き手が冷笑的態度を表明する

実際に、次の (16) のような例が観察され、ここでは Y にあたる「俳優」や「研究家」の肩書きを用いる人物を、その肩書きの真意を疑う書き手が冷笑している。また、(17) のように、「大物」や「知的階級」と謳われる人物を冷笑する例も見つかる。

- (16) a. この自称俳優 ()、日本に住んでないのかよ ((3) を再掲)
 b. 自称独身研究家 () とかいう胡散臭い肩書き名乗ってる時点で...⁸

⁷ (13a) は木村氏が山田氏に対して皮肉を込めて、「美人過ぎる ()」と評価したならば使用できるが、その場合引用の解釈は得られない。

⁸ <http://ai.2ch.sc/test/read.cgi/newsplus/1510073568/772->

- b. <給食に異物が混入した事件について>自分が食うわけじゃないからって
て栄養バランス () しか見なかったんだろ¹⁴

(21) (20a) について：[X (不特定人物) は] [日本が経済大国だと考えている]

これまで、空用法は (15) に提示した意味機能を持ち、また冷笑の意味が成立する背景に (18) で挙げた「主題+解説」の構造が備わっていることを見てきた。次節では、空用法の制約を取り上げ、この構造が確かに内在していることを裏付ける。¹⁵

3.3 空用法の制限：属性としての冷笑的態度

空用法の冷笑的意味の背後に存在すると思われる「主題+解説」の構造は、益岡 (1987, 2008) が記す「事象叙述」と「属性叙述」の種類のうち、属性叙述に概ね対応する。簡潔に記すと、事象叙述とは、ある時空間に実現・存在する出来事（現象）を表現するものであり、一方で属性叙述とはある対象がある属性（特徴や性質）を有することを表現するものである。一般に、出来事、動作、一時的な状態を描く (22) は事象叙述であり、主語の恒常的な性質を述べる (23) は属性叙述に分類される（影山 2009, 2012）。

(22) 事象叙述文：

昨日、友人に双子が産まれた。

(23) 属性叙述文：

ネコ（というの）は、ネズミを追いかける（もの）だ。[*毎日5時から6時まで]（影山 2012: iv）

もし空用法が容認される意味的背景に「主題+解説」を、すなわち属性叙述を要するならば、空用法が叙述文で生じた際に事象叙述では現れないことが予測される。この予測は (24)、(25) の対比によって正しいことが判明する。つまり、(24) では空用法が事象修飾として容認されないのに対し、属性修飾する (25) では認められやすい結果となる。¹⁶つまり、空用法が叙述文と共起する際は、属性叙述文でなければならない制

¹⁴ <http://blog.livedoor.jp/dqnplus/archives/1940022.html>

2017/09/17 採取

¹⁵ ただし、(15) に示した意味機能とは異なる振舞いを見せる例も存在する。次に挙げる (i) は、丸括弧に前置される「テレビ」そのものを冷笑対象としている点で異なる。また、文面には現れていない「テレビが一般的に評価を受けていること」に関して冷笑的態度を示していると考えられる。このような例が (15) による一般化とどのような関係付けができるかは今後の課題としたい。

(i) 事務所主導の番組作りもテレビ () が廃れた理由の一つ

(<http://hamusoku.com/archives/9694142.html>)

¹⁶ (25b) のような文には、空用法が馴染みにくいようである。この容認度は (15) の一般化と語用論的推論から説明が可能である。すなわち「彼」に対して、普遍的属性「長身である」ことを疑問視するこ

約が課されているわけである。

- (24) a. *太郎は10分間グラウンドを走った ()
 b. *そのアイドルは、しばらくかわいく踊った ()
- (25) a. 太郎は愛想が良い ()
 b. ?彼は長身だ ()

さらに、連体修飾節に後続して丸括弧が現れた(26)はいずれも容認されない。この結果は、特定の事象に対して冷笑的態度を表明できないことが示唆される。同時に、(26)からは(18)のような「主題+解説」の構造を背景に導けないために非文となったという理由付けができる。

- (26) a. *太郎は今日、昨日太郎を殴った () 次郎に会った。
 b. *太郎は、たった今椅子に腰掛けた () 次郎を殴った。

もしかすると、空用法の制約は、属性・事象という要因ではなく、品詞に依拠した制約と思われるかもしれない。確かに、これまでに例示したデータは、どれも動詞の直後に生起する丸括弧が容認されず、名詞や形容詞の直後であれば生起できた。しかし次の表現(27)は、動詞の直後に現れているのにも関わらず容認される。

- (27) 太郎は、とても頼れる () 先輩だ。

(27)の容認性も、空用法は属性叙述文としか共起しないことから説明できる。日本語の可能形[-(rar)eru]は、状況可能、能力可能、属性可能の3種類の意味用法を包括しているが、属性可能のみが属性叙述に相当する(cf. 渋谷 1993, 影山 2012)。次の(28)-(30)で明らかのように、丸括弧の空用法は属性可能のみ現れる。

- (28) 状況可能 [事象叙述]
 *アルタイルは、昨日僕たちが見(ら)れた () 星だ。
 *先生が休みだから、今日だけは自由にマンガが読める ()。
- (29) 能力可能 [事象叙述]

とは不自然だからである。このようにやや容認されにくい文であっても語用論的観点を踏まえれば、(15)の定式化によって説明可能である。

*太郎は、昨日だけなんとか 100 メートルを 10 秒台で走れた ()

(30) 属性可能 [属性叙述]

太郎は、頼れる () 先輩だ。

上司の太郎は、率直に話せる ()。

この結果から容認されない事例の理由は、空用法が動詞を制限しているためでなく、書き手の冷笑的態度を表すために必要な属性叙述の構造を背景に持ちえないためであると推察できる。¹⁷

ここで重要なことは、他の言い回しであれば、特定の命題に対して書き手の冷笑的態度を示せられることだ。例えば、容認されない (31) とは対照的に、(32) は話者志向の副詞句や「-てしまう構文」を用いることで、話者の態度を表す。ゆえに、空用法を用いて書き手の冷笑的態度が事象に対して示せないことは、言語全般に見られる現象ではなく丸括弧表現の空用法に課された特異的な制約なのである。

(31) <太郎が大学生に会ったことを、書き手が冷笑するという意味で>

*太郎は、その意識高い男子大学生に会った ()。

(32) a. 愚かなことに、太郎はその意識高い男子大学生に会った。

b. 太郎は、その意識高い男子大学生に会ってしまった。

以上の考察より、本研究は、丸括弧表現の空用法を先に提案した (15) によって一般化が可能であり、またその背景には (18) による構造が関与していることを主張する。本節は、叙述文と共起した空用法の例を中心に上げ、事象叙述とは相容れないことを示すことで、(18) の構造が妥当であることを示した。

インターネットスラングという限定的な環境の中で誕生したために、空用法は極めて珍しい形式 (記号体) を持つ。しかし、それだからといって、必ずしも捉えどころのない曖昧な意味を表すわけではなく、ある程度言語的な規則に沿って意味的な一般化が可能であることを示した。¹⁸

¹⁷ (28)-(30) の例文の一部は、影山 (2012: 18) を参考にしている。

¹⁸ 本稿では、空用法が叙述文と共起した際は属性叙述でなければならないと結論付けた。ところが (i) のように本来容認されない事象叙述であっても、次の (ii) のように詳細な文脈を与えた場合容認されやすくなることがある。

(i) *太郎は、昨日次郎を殴った () そうだ。

(ii) <昨日、次郎が激昂し、大勢で彼を止めていた。その際、拍子で太郎の手が次郎に当たってしまったのだが、次郎は太郎が殴ってきたと主張する。この状況をすべて把握している人物が書いたものとして、>

?次郎に言わせれば、太郎は昨日次郎を殴った () そうだよ。

4 新たな方向性：間主観的用法への拡張

これまで、丸括弧表現の空用法は直前に現れる語句に関与する冷笑的態度を示すことを明らかにした。しかし、最近では、文末に生起し命題に対する冷笑的態度を示す (33)、(34) の例が観察される。本節は、この使用例について触れておこう。

(33) もう宿題あきらめた ()¹⁹

(34) <課題の締め切りに追われている中でのやり取り>

A: ありがとう！ってか、みんなこの時間までやってるのねw

B: なんかTLにdクラスの人多いよね笑

私まだ何もやってないからやばい ()²⁰

この用法は、これまで考察してきた空用法の解釈とはいくぶん異なる。つまり、(33) や (34) は、書き手の不備・不足事項への言及に続けて丸括弧を用いることで、その命題に対して読み手に冷笑的態度を促すという、ある種自虐的な解釈を生んでいる。したがって、(34) ならば次の (35) によってパラフレーズできるだろう。このような例は、容認できる者が限定されるため、空用法におけるさらに新規的な使用と考えられる。²¹

(35) 愚かなことだって思って欲しいんだけど、私まだ何もやってないからやばい。

加えて、(35) から明らかのように、これまで命題修飾を認めなかった空用法が自虐的解釈へと拡張を遂げた過程で、文末に生起して命題修飾を行えるようになったことも興味深い。次の (36) や (37) では、丸括弧表現の空用法が確認要求を表す「だろう」や伝達態度を指示する「よ」に後続していることが分かる。益岡 (1991) などが記すモダリティの階層関係に基づけば、空用法が、聞き手を意識した話し手の伝達態度を表す対人的モダリティに極めて類似する振舞いをしていると考えられよう。

それでも (15) による一般化で説明は可能である。つまり、文脈の効果により「[[手を当ててしまったのではなく] 殴った] という評価 (判断) をしている [次郎] に対して、[殴った] という評価 (判断) を疑問視している書き手による冷笑的態度の表明」と解釈される。しかし、このような表現において、どのような文脈を与えたときに、どの程度容認性に変化をもたらすのかはまだ明らかになっていない。今後の課題としたい。

¹⁹ <https://twitter.com/ryousukeozora/status/847631555895754752>

2017/06/26 採取

²⁰ <https://twitter.com/kbcha10/status/871420135654834177>

2017/06/05 採取

²¹ この用法は、特に (より) 若い世代で使用されている大変新規的な用法のようである。インフォーマントとして協力していただいた3人は、いずれもこの用法を承知していたものの、容認性に揺れが見られた。

(36) ほらね? 言った通りでしょ ()²²

(37) ...何もやってないよ何なら昨日の夜からずっと読書してるよ ()²³

このようなある種の自虐的解釈は、前節までに議論した用法と決して無関係ではない。すなわち、語句に関与する書き手の冷笑的態度の表明の用法から自虐的解釈の用法へと意味拡張する過程は、Traugott (2003) が提案する「間主観性 (Intersubjectivity)」に通じるものがあると主張したい。

間主観性とは、話者志向を示す主観的度合いが高まった結果、聴者の解釈や理解を推定した意味へと変化した段階を指す (Traugott 2003: 128-129)。換言すれば、話者が積極的に描写事態に関わった主観的事態から、さらに話者と聴者との間をつなぐコミュニケーション上の機能へと変化した表現である (早瀬 2009)。丸括弧の空用法は、まさに間主観的な意味変化の過程にあると考えられる。当初、「ある文内に示された語句に関与する客観的事物に対して、書き手の冷笑的態度を表明する」用法が、文末に生起し、「書き手が関与する特定の命題に対して、読み手に冷笑的態度を促す」用法に変化している。この結果、書き手と読み手の二者間を結ぶ機能へと発達した。以上より空用法は、書き手の心的態度を示す用法から、読み手志向の用法へと変化しており、間主観性が高まっていると考えられる。

本節では、(33) や (34) のような空用法のさらなる使用例を見てきた。これらの使われ方は、前節までに考察してきた冷笑的態度を示す用法とはいくらか異なる。しかし、それは無秩序に拡張していったわけではなく、間主観性という伝達機能に反映された言語理論に沿った拡がりを見せているのである。

5 おわりに

本稿は、インターネットスラングとして使用される丸括弧表現の空用法について、記述的・理論的側面から検討し、独自の意味的特性を考察してきた。本稿の分析を通じて、空用法は概して「直前の語句に関して、それを使用したり評価されたりする人物・事物に対する書き手の冷笑的態度の表明」を示すことを明らかにした。また、空用法の新しい用いられ方を観察したが、これも雑多に使用されたわけではなく、間主観性に従って、書き手中心の用法から読み手志向の用法へと意味拡張がなされていることを明らかにした。

もちろん、本研究には課題が残されている。脚注で触れた次の例は、丸括弧に前置す

²² <https://twitter.com/mikadukimonster/status/918393027730608128>

2017/11/17 採取

²³ <https://twitter.com/UuumiY01/status/912447905344102405>

2017/11/17 採取

る語句そのものを冷笑する例であり、本稿で提案した一般化への例外となり得る。この使用例について、一般化とどのような関連性が認められるのかは検討課題である。

(38) 事務所主導の番組作りもテレビ () が廃れた理由の一つ

また、空用法の特性を明らかにするために、他の丸括弧表現、とりわけ「(笑)」との関連性を考察することは必須であろう。それらの関係を見つめることによって、空用法が用いられた動機付けの解明に繋がることが期待される。

しかし、少なくとも本研究の成果として、粗野な領域と思われがちな表現であっても、言語学的概念に基づく文法規則によって捉えられる現象であることが示された。

参考文献

- 早瀬尚子. 2009. 「懸垂分詞構文を動機づける「内」の視点」坪本篤郎、早瀬尚子、和田高明（編）、『「内」と「外」の言語学』55-97. 東京：開拓社.
- 影山太郎. 2009. 「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136: 1-34.
- 影山太郎. 2012. 「属性叙述の文法的意義」影山太郎（編）、『属性叙述の世界』3-35. 東京：くろしお出版.
- 黒田一平. 2015. 「文章理解のメカニズムの解明にむけて—括弧の曖昧性はどのように解消されるか—」『日本語用論学会第17回大会発表論文集』10: 49-56.
- 益岡隆志. 1987. 『命題の文法—日本語文法序説—』 東京：くろしお出版.
- 益岡隆志. 1991. 『モダリティの文法』 東京：くろしお出版.
- 益岡隆志. 2008. 『叙述類型論』 東京：くろしお出版.
- 中山悟、森田和宏、泓田正雄、青江順一. 2010. 「括弧表現の分類・抽出に関する研究」『言語処理学会第16回年次大会発表論文集』16: 379-382.
- 洪谷勝己. 1993. 『日本語可能表現の諸相と発展』 大阪：大阪大学.
- 谷口一美. 2005. 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』 東京：ひつじ書房.
- Traugott, Elizabeth Closs. 2003. "From subjectification to intersubjectification." In Hickey, Raymond (ed), *Motives for Language Change*. 124-140. Cambridge: Cambridge University Press.
- 山森良枝. 2008. 「引用と logophoricity—日本語における括弧の機能について」『第25回日本認知科学学会大会発表論文集』25: 370-375.
- 山梨正明. 2004. 『ことばの認知空間』 東京：開拓社.